

卷頭言

〈小特集〉

観光、デジタルテクノロジー、モビリティ・ジャスティス

Special Issue :
tourism, digital technology, mobility justice

本特集は、二つの国際シンポジウムをきっかけに組まれている。それは、立命館大学・人文科学研究所重点プロジェクト「グローバル化とアジアの地域」主催のもと、ミミ・シェラー氏（米国ウースター工科大学）に基調講演を依頼して2022年1月23日（日）に実施されたZoomシンポジウム「ツーリズム・モビリティーズを問い直す——COVID-19 以後のモビリティ・ジャスティスとは何か」、およびアンソニー・エリオット氏（南オーストラリア大学）に基調講演を依頼して2022年2月22日（火）に実施されたZoomシンポジウム「Dxの光と影——デジタル革命の人文・社会科学」である。

現在、観光はデジタルテクノロジーの力を借りながら大きく変容を遂げ始めている。本特集に掲載されている松本健太郎氏の論稿において述べられているように、「現代人にとっての旅や観光は、デジタルテクノロジーとの緊密な関係性、あるいはそれら諸要素が相互におりなす動的なネットワークのなかで進展するものであり、もはやそれ抜きに『旅の体験』を捉えることは困難であるといっても過言ではない」のである。では観光はデジタルテクノロジーとの関係性の中で、いかなる特徴を帯び始めているのか。とくに新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大以後、デジタルテクノロジーが加速的に社会に大きなインパクトをもたすようになるとともに、そうした問いは重要性を増している。

そしてデジタルテクノロジーの力を借りて大きく変貌しつつある観光が、今後いかにして「モビリティ・ジャスティス（移動の公正さ）」を実現して

いくべきなのかも喫緊の研究課題になっているのではないか。先進諸国の観光客たちは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大以前、自家用車やジェット機を必要以上に活用し、観光において過剰なまでに移動し、「オーバーツーリズム」現象をひきおこしてきた。それはローカルな地域の文化や暮らしをかき乱してきたばかりではなく、グローバルに地球規模の温暖化等の問題をもたらしてきた。これからの時代において、これを是正し、持続可能なモビリティ（移動）を可能ならしめていくためには、何が、どのように考えられねばならないか。こうした問いもまた、重要なものであろう。

そこで本特集は、この二つの問い（すなわち「観光はデジタルテクノロジーとの関係性の中で、いかなる特徴を帯び始めているのか」という問いと、「これからの時代において、持続可能なモビリティ（移動）を可能ならしめるうえで、何が、どのように考えられねばならないか」という問い）を探究したいと考えた。ぜひ、本特集に掲載されている論稿の数々をご一読頂きたい。そして、これらの問いに関する活発な議論が巻き起こってくれることを期待している。

2022年12月

立命館大学文学部教授・人文科学研究所所長

遠藤 英樹